（別紙１）

論文の内容の要旨

論文題目：長浜曳山祭の都市社会学：伝統消費型都市の生活共同と社会的ネットワーク
氏　　名：武田俊輔

本論文の目的は、近世以来の歴史をめぐる地方都市（伝統消費型都市）、特にその都市を構成する名望家層である商工業者たちの「家」を中心に構成された「町内」の社会構造と社会的ネットワークについて明らかにすることである。具体的には「町内」が担い手となる都市祭礼を通じて、「町内」内部や「町内」間の社会関係、「町内」社会を構成する人びとの社会的ネットワークや、「町内」と行政・経済団体との関係性や相互交渉を描き出す。そのことを通じて伝統消費型都市の社会構造とそこに生きる人びとの社会意識を明らかにし、また従来の都市社会学において十分に展開されてこなかった地方都市の分析枠組みを提示する。

本論文は 3 部構成である。「第Ⅰ部　課題の設定と分析視角」では、論文の問題設定と研究対象の説明、先行研究の検討、分析視角の提示を行う。第 1 章「本論文の目的と研究の視角」では上記の本論文の課題を設定し、具体的な研究対象として典型的な伝統消費型都市である滋賀県長浜市、特にその「町内」である「山組」という地縁組織をとりあげ、祭礼が執行する場とその準備のプロセスにおける山組の人びと同士や山組間、山組と外部のアクターとの関係性について分析することを論じた。

第 2 章「都市社会学における『町内』社会研究の不在とその可能性」では先行研究の検討を行った。戦後の都市社会学では、規範としての市民意識の確立を問うコミュニティ論が中心となり、「家」同士の関係性を基盤とした「町内」、そして「町内」を核とする伝統消費型都市の社会構造に関する分析は不十分にとどまった。本論文では都市を聚落的家連合として分析する有賀喜左衛門と中野卓の視点の意義を確認し、それを引き継いだ有末賢と松平誠による都市民俗・都市祭礼を通じた都市社会学的研究、さらに都市人類学や都市民俗学などの関連領域の研究について批判的に検討した。その上で①祭礼における社会変動への対応をめぐる葛藤・対立、妥協・決定のプロセスに注目することによって、祭礼自体や「町内」の変容の契機を具体的に描き出す必要性、②世代を越えて引き継がれた「家」同士の「家連合」的な関係性において、負担と名誉の配分をめぐる「家」同士の全体的相互給付関係が成り立つ仕組みを分析する必要性を論じた。

第 3 章「本論文の分析視角：コモンズとしての都市祭礼」では、農村社会学における地域資源の管理に関する研究やコモンズ論を批判的に検討しつつ、伝統的な地方都市の社会構造を明らかにする上での都市祭礼をコモンズとみなすアプローチの有効性を論じた。本論文では都市祭礼を以下の①～⑨の資源が管理される一連のサイクルとみなす。すなわち①人材、②山車等のモノ、③技能、④資金といった資源が入力され、⑤「町内」における経験・記憶を踏まえて伝承・更新された⑥ルールや知識を通じて、⑦家や個人の名誉・威信、⑧名誉・威信を競い合うことで発生する興趣、⑨祭礼が創り出す文化財・観光資源としての価値といった公共的用益が出力される（このうち⑨は①～④の資源を外部のアクターから獲得すべく活用される）。こうした諸資源とその入出力のサイクルを分析することを

通じて、「町内」内部や「町内」間、「町内」と見物人・行政・経済団体・専門家等との関係性を析出し、それを通して地方都市の社会構造を描き出すことを論じた。

諸資源をめぐる具体的な分析は「第Ⅱ部　都市祭礼を構成する諸資源とその伝承メカニズム」内の第 4〜8 章において行っている。第 4 章「町内における家と世代：祭礼をめぐるコンフリクトとダイナミズム」では町内の「家」同士、また世代間の関係性という「町内」の内部構造を分析した。居住歴の長さや間口の大きさといった「家」の格に応じた、各「家」の金銭的・人的負担の拠出とそれに対する名誉・威信の配分とのバランス、そして世代間における名誉･威信の配分をめぐって､「町内」では常にコンフリクトが発生する。そうしたコンフリクトをともなうドラマを通じて､全ての成員に対して興趣が配分される。そして興趣を伴うがゆえに祭礼をめぐる人びとの経験・記憶が共有され、祭礼におけるルール・知識がダイナミズムをともなって伝承される。さらに名誉・威信をめぐる不満が次回以降の祭礼で挽回し､納得のいく形で全体的相互給付関係が満たされることを期待して、各「家」はその後も祭礼にコミットメントしていく。

第 5 章「山組間における対抗関係の管理と見物人の作用：裸参りを手がかりとして」では裸参りという 4 日間の行事を通じて、複数の町内間の対抗関係を通じた都市祭礼の興趣が、町内間に加えて見物人をも含み込む関係性の中で創出されるメカニズムを分析した。山組同士がそれぞれ互いの威信を誇示しあう経験や、過去の対抗関係をめぐる世代間の記憶の共有を通して山組間に「因縁」という対抗関係のフレームが創出され、それを通じた興趣が発生する。祭礼を眺める見物人は喧嘩による興趣を期待しつつ、噂話の伝播や山組への働きかけを通じて対抗関係を煽るといった形で、フレームの構築や強化に関与していく。

第 6 章「シャギリをめぐる山組間の協力と山組組織の再編」では、祭礼を成立させるために必要なシャギリ(囃子)という技能とその人的資源の山組による調達に焦点を当てる。高度成長期以降に農村からのその外部調達が困難となり、山組内での人材の育成と山組間の相互協力による調達が行われるようになった。またシャギリの担い手を確保すべく、それまで山組内の「家」の格に基づく秩序によって行われてきた祭礼が、より多くの「家」や女子、さらに山組外の参加者にも開放されていく。さらに各山組でのシャギリの練習の場が祭礼の伝承に重要な意味を持つようになり、山組における人材育成の仕組み全体も変容していく。

第 7 章「若衆たちの資金獲得と社会的ネットワークの活用」では、山組内の各「家」が拠出する祭典費だけでは不十分な資金を、祭礼の担い手である若衆たち 1 人 1 人が家業や生活の中で関わる山組内外の人びととのネットワークを駆使することを通じて獲得する仕組みと、それが若衆や山組の社会関係資本という威信の誇示ともなるという機能を分析した。その際には山組の範囲を超えた自分の家の取引先・仕入れ先、青年会議所による若手事業者間の社会関係資本が駆使され、祭礼の資金調達自体もそうした地方都市の社会的ネットワークを創り上げる媒介となっている。

第 8 章「曳山をめぐる共同性と公共性：コモンズとしての曳山の管理とその変容」では、各山組が曳山（山車）という資源の管理のために、公共的用益の提供を通じて外部のアクターとの間で創り上げた社会関係について論じた。第一に中心市街地への集客という観点から、山組の若衆メンバーを中心に青年会議所を通して創り上げた曳山博物館構想の実現

を通して、曳山の修理設備を入手するプロセスを示した。第二に山組が文化財という公共的用益への曳山の提供を通じて修理に必要な資金と技能を入手し、その一方曳山の管理の主導権が専門家や行政へ委譲されざるを得なくなり、また山組間で曳山を競い合うという祭礼のあり方も変容したことを論じた。

第Ⅲ部「コモンズとしての都市祭礼／地域社会／公共性」では、第Ⅱ部の分析を集成しつつ、祭礼全体の資源管理のあり方を論じている。第 9 章「観光・市民の祭り・文化財：祭礼の継承における公共的な文脈の活用と意味づけの再編成」では、戦前から戦後にかけての長浜の社会変動を背景に、山組連合が曳山祭をそれぞれの時期の社会的文脈に合わせてどのように公共的用益を提供して祭礼を継承してきたか、その際に行政や観光協会といった外部のアクターとどのような関係性を取り結んできたかについて分析した。

第 10 章「本論文における知見の整理と結論」では本論文の都市社会学や祭礼研究、そしてコモンズ論に対する意義について明らかにした。第一に従来の都市社会学では「家」とコミュニティの分断、「家」や「町内」のような共同性の崩壊を前提にした「コミュニティ」の可能性を論じてきた。これに対して本論文では聚落的家連合による全体的相互給付関係としての「町内」が、公共的用益と引き換えに行政的な枠組みや地域経済団体、ボランティアといった多様な縁、外部のアクターとの関係性を活用して資源を調達し、コンフリクトや対抗関係のダイナミズムを通じて変容しつつ存続していく仕組みを明らかにした。

第二に、本論文では従来の祭礼研究と異なり、祭礼という非日常の場だけでなく、そうした非日常と日常との関係性を分析することができた。祭礼をめぐるコンフリクトについての「町内」での日常的な語りは興趣や経験・記憶の共有、ダイナミズムをともなうルール・知識の継承をもたらし、また祭礼の資金調達と結びついた形で日常的な社会関係資本も構築されている。町内の人びとは単に非日常の場のみにおいて祭礼を行うのではなく、そのように日常においても祭礼を生きている。

第三にコモンズ論への貢献である。従来のコモンズ論は共同体による資源管理を自己完結的にとらえ、外部のアクターとの関係性を通じた管理や、管理の仕組みの変化や新たな創出の可能性を論じてこなかった。本論文は祭礼をめぐる諸資源の管理とその公共的用益を通じた外部からの調達を通じて、町内・町内間の共同性と町内にとどまらない社会的ネットワークや公共性の交差・重層として地域社会を描くことができた。さらにコモンズの管理のあり方の、外部のアクターとの関係性を通じたフレキシブルな変容や、内部のコンフリクトや対抗関係を通じて更新されるダイナミズムを描き出すことができた。

以上が本論文の要旨である。